

第2章 文化としての源氏物語

当時の貴族は和歌や文学を嗜み、双六や貝合わせなどのさまざまな遊びに興じていました。日本独自の国風文化が形成されるにつれ、源氏物語をはじめとする様々な物語や和歌集が生み出されました。文学作品の中でも源氏物語は、中世には武家にとって必須の教養であったことが大友氏にゆかりのある資料から窺えます。その後、源氏物語は公家や武家だけではなく、広く受け入れられていきました。



十二月言葉手鑑 十一月 源氏物語巻21少女の一節
(大分市歴史資料館)



貝合わせ (大分市歴史資料館)

第3章 源氏物語と植物

源氏物語には、100種類を超える植物名が登場し、源氏物語絵にも多くの木々や草花が描かれています。物語の様々な登場人物、とりわけ女性たちには、夕顔や末摘花のように草花の名がつけられたり、特定の花に例えられる場面が織り込まれ、草花を通じてその人物の身分や容姿、性格などを表現するだけではなく運命も暗示し、物語に彩りと深みを与えています。

| フジ | | ムラサキ | | アサガオ | | ヤマブキ |



源氏が最初に愛した藤壺を象徴し、後には源氏の娘の明石の姫君もこの花に例えられます。



源氏は紫の上を見初めた時、ムラサキに託してその想いを歌に詠みます。

※写真はデジタル植物写真集
<http://plantidentifier.ec-net.jp/>より



朝顔の君は源氏の求愛を拒み続け、源氏は唯一失恋を味わいます。



夕顔の娘で源氏の養女となった玉鬘は美しく成長し、八重のヤマブキに例えられます。

大分市歴史資料館

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

ニュース

vol.
132
2024. 10.5

光と紫

描かれた源氏物語

発行 大分市歴史資料館 〒870-0864 大分市大字国分960-1 TEL:097-549-0880 FAX:097-549-5766

【開館時間】入館は16:30まで 【休館日】※ただし祝日の場合は開館 9:00-17:00 月曜日(第1月曜を除く)、第1火曜日 祝日の翌日
【年末年始の休館日】12/28-1/4 【観覧料】※団体は20人以上 大人210円(団体150円) 高校生100円(団体50円) 中学生以下無料

※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方とその介護者1名は無料。◎入館時に受付で手帳を提示してください。
※都合により、予定を変更する場合がございます。

発行日:令和6年10月5日



会期

前期 | 令和6年10月5日(土)~11月4日(月)
後期 | 令和6年11月6日(水)~12月8日(日)

大分市
歴史資料館

日本古典文学を語るうえで『源氏物語』は欠くことのできない作品です。1000年以上前に紫式部が著した物語は、雅な宮廷文化や複雑な人間模様を伝え、時代を超えて今なお多くの人に親しまれています。平安時代に宮中の人々を魅了した源氏物語は、戦国時代に大友氏にも武家の教養として嗜まれていました。

今回の展示では、色彩豊かな情景を描いた25枚の源氏物語絵を、前期・後期に分けて展示し、平安文化を今に伝える源氏物語について紹介します。

第1章 描かれた源氏物語

源氏物語は今から1000年以上前の平安時代に、紫式部によって生み出されました。当館が所蔵している25枚の源氏物語絵は、およそ400年前に描かれたもので、元は屏風の形をしていました。54帖から選ばれた各場面は六曲一双の屏風に煌びやかに描かれていましたが、ある時期にそれぞれの場面ごとに切り分けられました。それでも源氏物語絵が持つ魅力は色あせることなく、私たちを今でも魅了しています。

源氏物語絵 巻5 若紫



春の夕暮れ、源氏が病氣治癒の加持祈祷を受けるため訪れた北山で、後に生涯の伴侶となる、藤壺に面差しの似た美しい少女を見出す場面です。
満開の桜の中で、伏籠から逃げた雀を追って縁先に姿を見せる可憐な少女と、その様子を垣間見る源氏の姿が描かれています。

源氏物語絵 巻6 末摘花

常陸宮邸で一夜を過ごした源氏が、末摘花の姿を初めて見た雪の朝、庭木の橋に降り積もる雪を従者に払わせている様子が描かれた場面です。屋根に雪が降り積もる邸宅に佇む後姿の女性が末摘花で、大和絵の手法により後姿の頭部は非常に小さく描かれていることが分かります。邸内を覆う白い雪が、冬の情景を際立たせています。



源氏物語絵 巻8 花宴



2月下旬に行われた桜の宴の夜更けに、藤壺を求めて彷徨い歩いていた源氏が、宮中で朧月夜（右大臣の六の君）と出会う場面が描かれています。
弘徽殿の細殿を「朧月夜に似るものぞなき」と口ずさみながら近づいてくる女性と、源氏の視線が初めて交わる瞬間をとらえています。庭では桜が夜の闇の中で美しく咲いており、場面に彩りを与えています。

源氏物語絵 巻10 賢木

晩秋の9月、新斎宮の娘と共に伊勢に下ろうとする六条御息所を嵯峨野の野宮に訪ねた源氏は、変わらぬ心を賢木になぞらえ、御簾越しに賢木を差し入れました。金雲が構図の多くを占めており、2人の姿に焦点が当てられた1枚です。左端に描かれている黒木の鳥居は最も神聖な鳥居とされ、野宮が伊勢に参る前の身を清めるための神聖な場であることの象徴として描かれています。



源氏物語絵 巻21 少女



9月の風の吹く夕暮れに、源氏の邸宅「六条院」に色付く紅葉を、屋敷内の「秋の町」に暮らす秋好中宮が、「春の町」に住む紫の上へ届けようとする場面です。
紅葉を箱の蓋に乗せた童女が廊下を歩んでくる姿と、秋好中宮ら姫君たちの姿を源氏がのぞき見している様子が描かれています。物語には無い、垣間見をする源氏の姿を描く独自性が認められる1枚です。秋好中宮の袿には紅葉が描かれています。

源氏物語絵 巻23 初音

正月に六条院の明石の姫君の部屋を源氏が訪れる場面で、庭先には紅梅が咲き誇っています。娘の姫君の将来を考え、身分の高い紫の上に育ててもらうことを選んだ明石の君から姫君へ、正月の贈物と歌が届いており、それを読み憐れむ源氏の姿が描かれています。また、庭先で童女たちが今年最初の「子」の日に、小松を引き抜いて長寿を祝う新春の年中行事の様子も描かれています。

